

中世の土留め遺構全景

## 中世の土留め遺構

橋脚の北側で発見されたもので、<sup>かくちゅう</sup>角柱6本と<sup>あついた</sup>厚板2枚、<sup>れき こうちく</sup>それに礫で構築されています。東西方向に約13mを測りますが、さらに調査区外に延びており<sup>の</sup>全容は明らかではありません。その形態から川岸の土留め（護岸）などのために造られた可能性が強く、橋を架けた時と同じか少し新しい時代のものと推測されます。



角柱5

## こちらも巨大な木材です

<sup>あついた</sup>厚板は厚さ10cm、幅約1m、長さは西側が7m20cm以上、東側が5m10cm以上ある一枚の大きな板です。立てた板を<sup>かくちゅう</sup>角柱で支え、<sup>かわざし くす</sup>川岸が崩れるのを防いだのでしよう。<sup>れき</sup>礫も同じ目的で板の北側全体に<sup>つ</sup>積み積まれていると思われる。



角柱6



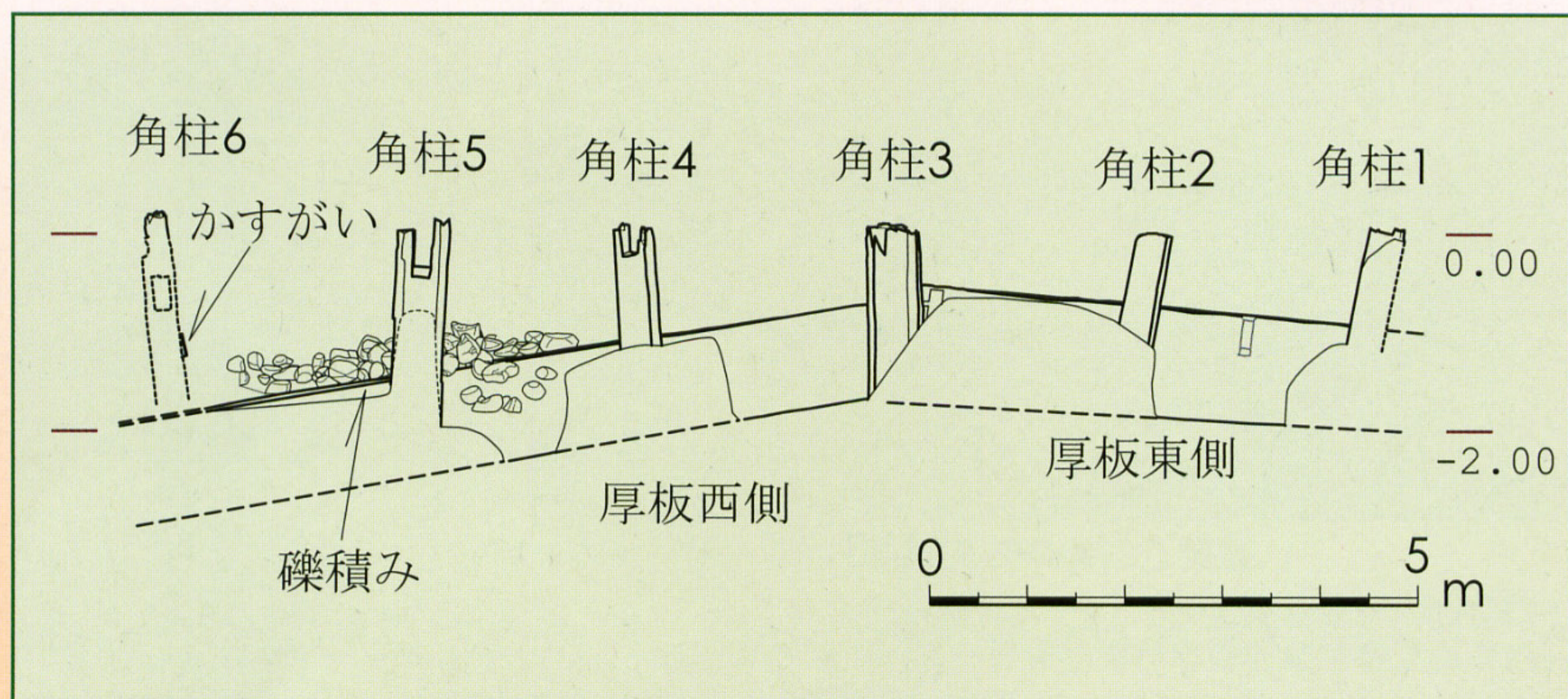
東側厚板



角柱3と西側厚板



角柱5と礫積み



<sup>あついた</sup>厚板と<sup>かくちゅう</sup>角柱には、土留めに必要のない加工部分が見られることから、使用された材料は、<sup>ざいりょう</sup>再利用されたものと思われる。<sup>ふなざい けんちくざい</sup>元は船材や建築材ではなかったかと考えられています。

※中世：一般的に鎌倉時代から安土・桃山時代